主日礼拝説教要旨　　　　　　　　　　　　　　　　　　2014年３月２日

**「彼を十字架につけよ」**

新約聖書ルカによる福音書第２３章１－２５節

**１　まず、ピラトのところへ連行された主イエス**

**不安定な立場にあったピラト。**彼は第５代ユダヤ総督として着任早々から騒乱の種を蒔いてユダヤの民からは不人気であった。しかし皇帝ティベリウスと、皇帝が政治を委ねた近衛長官セイアヌスの支持があったため、紀元26年から36年まで10年の長きにわたりユダヤ総督として在任した。ピラトの反ユダヤ的行動はセイアヌスの影響である。そしておそらくイエス処刑後の31年にローマでセイアヌスが失脚してから、後ろ盾を失ったピラトの立場が急変する。やがて彼はサマリア人を虐殺して反乱を招き、ローマに召還され、新皇帝カリグラによって解任される。詳細はタキトゥスの『年代記』とヨセフスの『ユダヤ戦記』『ユダヤ古代誌』に記されている。

**扇動された群衆**偽りの訴え「国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、自分こそ王なるキリストだと唱えた。」ピラトの質問「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスの返答「そのとおりである」。見抜いていたピラト「わたしはこの人になんの罪もみとめない」。群衆、「彼は、ガリラヤからはじめてユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動している。」扇動されている民衆が、主イエスを扇動者だと言う。

**２　ピラトからヘロデ王へ** **非常に喜んだヘロデ。**会って見たい、何か奇跡を行うのを見たいと望んでいた。いろいろと質問を試みたが、イエスは何もお答えにならなかった。祭司長たちと律法学者たちの激しい語調での訴え。ヘロデと兵卒どもによる侮辱と嘲弄。はなやかな着物を着せてピラトへ送りかえす。ヘロデとピラトとは互に敵視していたが、この日に親しい仲になった。

**３　再びヘロデからピラトへ**①ピラトは 「訴え出ているような罪は、この人に少しもみとめられなかった。 ヘロデもまたみとめなかった。現に彼はイエスをわれわれに送りかえしてきた。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。 だから、彼をむち打ってから、ゆるしてやることにしよう」。群衆は一斉に叫んで言った、「**その人を殺せ。**バラバをゆるしてくれ」。 ②ピラトはイエスをゆるしてやりたいと思って、もう一度かれらに呼びかけた。 しかし群衆はわめきたてて「十字架につけよ、**彼を十字架につけよ**」と言い続けた。③ ピラトは三度目に彼らにむかって言った、「では、この人は、いったい、どんな悪事をしたのか。彼には死に当る罪は全くみとめられなかった。だから、むち打ってから彼をゆるしてやることにしよう」。 ところが、彼らは大声をあげて詰め寄り、**イエスを十字架につけるように要求する声が勝った。**

最も異質なことは、裁かれるはずのない神の子がここで裁かれ、裁かれるべき者が裁かれずにいることにある。ありえないことが起こっている。そしてこのありえない裁きが、われわれの罪のありえない赦しの根拠とされているのである。父なる神のなさることは、わたしたちの思いをはるかに越えている。

ディボーションノート　９　　2014年３月３日―３月８日

|  |
| --- |
| ３月３日(月)　詩篇１２９篇信仰に生きようとすると、周囲からひどく迫害されることがあります。神を信じていない人なら平気で行うことを、自分はしたくないので断ると、白眼視され仲間はずれにされます。神の前に正しく生きるて良かったのだと後で分かるのですが、それまでに時間がかかります。「耕す者はわたしの背の上をたがやして、そのうねみぞを長くした」とは、背中に鞭があてられ苦しめられる様子だと読む人がいます。でも「主は正しくいらせられ、悪しき者のなわを断ち切られ。」ます。シオン(要害の意味　ダビデの町をさし、神がおられる場所をさす。)を憎む者とは、神を憎む者です。そういう人に対する呪いの言葉が最後に続きます。「あなたがたを祝福するとは言わない」。しかし、新約聖書では敵を愛するようにと、ローマ書12章にあります。 |
| ３月４日(火)　詩篇１３０篇「深い淵の底」(新共同訳)とは、重い病や苦しみのどん底、あるいは罪の深い底、滅ぼされる恐れの中でしょうか。そこから救いを求めて神に叫び祈るのです。神はその人の心に、「ゆるされる」という希望の光を点します。人は苦しみの中で、神の救いを待つのです。朝が来るのを待つ城壁の上の警備兵のように、東の空が次第に明るくなり、東雲(しののめ)が呼び覚まされるのを待つのです。待つことが信仰です。信じているから、期待しつつわたしたちは主イエスが再びこられるのを待っています。夜は必ず明けるように、主は来られます。わたしたちの救いは完成します。病から全く解放され完全な体が与えられます。 |
| ３月５日(水)　詩篇１３１篇　　心がおごり、目が高ぶり、自分の力の及ばない事まで自分にできると思いこむ。それが偽りの万能感です。信仰によって人が全能者になるのではありません。そのような信仰は焦りを生み、目に見える効果だけを求めます。人間関係で変えられるのは自分だけで、相手を思うように変えようとすることはできません。わたしたちは結果を求めて努力し、時には動かせる事もあります。しかし本当に動かせたかというと、神の助けと人々の協力がなくては動かせなかったと気が付きます。乳離れしたみどりご(色の緑ではなく生命力あふれる姿)が、その母のふところに絶対的な平安を得ているように、神に信頼しつつ最善を尽くすものでありたいと思います。神に安んじて最善を尽くすなら、結果に左右されず、希望をもって取り組み続けられます。今日も、明日も。  |
| ３月６日(木)　詩篇１３２篇前半はダビデが契約の箱をシオンの地に持ち込むための苦労が歌われています。神の箱は祭司エリの愚かな息子、ホフニとピネハスによって戦場に持ち出され、それで油断したことでペリシテ人に負けて奪われてしまいます。結局、神の箱はキリアテ・ヤリム(６節のヤアルの野)に20年間置かれ、放置されます。それをダビデが自分の町に持ち運んで来るのです。このダビデの辛苦を、神よ御心にお留め下さいと歌います。この歌が歌われた時代を、バビロン捕囚から解放され、帰国はしたものの、周囲の敵国から厳しく迫害され、国民は絶望しつつある時代とする解釈もあります。後半の11節からは、神は約束に対して誠実に実行されるとの励ましを語っています。都に上る歌の中で一番長い歌です。 |
| ３月７日(金)　詩篇１３３篇　エルサレムに向かう巡礼の旅では、仲間が実際の兄弟姉妹以上に深い信頼で結ばれます。「見よ、兄弟が和合して共におるのは、いかに麗しく楽しいことであろう。」ここでの兄弟は主にある兄弟姉妹です。教会も巡礼の旅の一団にたとえられます。共に座って神を礼拝し、一つの目的地に向かって山を越え川を渡り苦楽を共にする旅人の群れ、それが教会です。油は祝福を示すもので、主イエス・キリストの時代も、来客を迎えるために頭にオリーブ油を塗りました。主に高価な香油を注いだ女性もいました。神がわたしたちに祝福の油を豊かに流れ下るほどに注いで下さると歌います。仲良くすることが祝福の基です。 |
| ３月８日(土)　詩篇１３４篇都のもうでの巡礼歌の最後の詩篇です。1－2節は巡礼を終えて帰郷する信徒が、夜に、神殿に仕える祭司に向かって、挨拶を込めて歌った部分です。祭司は人々に祝福を取り次ぐ人ですが、祭司自身が祝福されて神を賛美しないなら祭司の本分を失います。神をほめ続けてくださいと別れの歌を歌います。後半は祭司たちの応答の歌です。どうぞ天と地を造られた主がシオンからあなたを祝福されるように。あなた方が帰郷する旅の全てにあって、神の祝福が共にありますように。新聖歌198番の賛美を思い出します。この祝福がわたしたちの人生の旅にあっても与えられています。礼拝の最後の祝福の祈りは、まさに祝福そのものです。あなたがどこにいるとしても、何をするとしても、いつでも神様が共におられる。三位一体の神の臨在の祝福。これ以上の恵みはありません。ハレルヤ。 |